

男の「生きづらさ」を再考する



Re-Design For Men代表 西井 開さん

〈プロフィール〉

男性の語り合いの場をつくる市民団体Re-Design For Men代表。男性問題を語り合う「男の勉強会」、モテないことに悩む男性たちの当事者研究グループ「ぼくらの非モテ研究会」を主催。300人以上の男性たちの被害経験や生きづらさ、欲望、加害経験について話を聞いてきた。立命館大学人間科学研究科博士後期課程。専攻は臨床心理社会学。

個別の男の傷つき

「男の生きづらさ」という言葉がここ数年広く取り上げられるようになった。十分に稼がなければならない、弱音を吐いてはならないなどの「男らしさ」のプレッシャー。非正規雇用の増加、生涯未婚率の上昇など、男性を取り巻く環境の変化に伴う男性たちの挫折などに関する議論である。既存の男性学はこうした社会的な問題としての「男の生きづらさ」を可視化させた。ここではもう少し男性たちの個別的な問題に焦点を当てようと思う。

私はRe-Design For Menという市民団体を主催しており、月に2回、男性たちが自身の抱える苦労について語り合うグループを大阪で開いている。毎回8名程度、主に20代から30代の若年男性が集まっている。彼らは(そして私も)モテない、周りとうまくコミュニケーションをとれないなどの悩みを皮切りに、クローズドな空間で様々な「生きづらさ」を語る。

“上司がパワハラ気質で、「男やったらこれぐらいせえや」とか「男のくせに7時に帰るんか」とかそういうことがあって、機嫌悪い時とかは本当にひどくて「死ね」とか「殺すぞ」みたいなことも結構言われてて、奴隷みたいな気持ちですごいしんどかったです。”

多く聞かれるのは、いじめ、パワハラ、虐待など、暴力被害の経験である。そして、男性たちは上記のエピソードのように、「男のくせに」「お前が一人前じゃないから」など規範的な男性から逸脱していることを理由に暴力を加えられることが多い。

きちんと「被害者」をやること

こうした暴力は実に巧妙で、被害を受けた男性は相手ではなく「自分が悪いからダメなんだ」と思うようになる。被害を受けたことに加え、自分で自分を責めるといった二重のダメージを受けることになるのである。また、彼は被害を受けたことを周囲に話さない。泣き言を言うな、と言われてたり、男性集団の中では、より下に見られたりするリスクがあるからだ。こうして彼は被害の痛みを一人で抱え、加害者ではなく自分を責め続けることになる。男性たちの個別的な「生きづらさ」が表面化しないことにはこうした背景があるのではないだろうか。

私たち男性に必要なのは、きちんと「被害者になる」ことである。それは「女性の社会進出によって男性の権利が奪われている」といったような誤った被害者意識ではない。自分の経験を振り返り、つらいことをつらいと思うこと。何がつらかったのか、をきちんと精査すること。そのプロセスを歩むために、クローズドで安全な男性相談は一つの社会的資源になるだろう。